

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

1

2024
January

No. 531



4年ぶりの「IPCR 国際セミナー」日本開催に集った参加者たち（会場：立正佼成会神戸教会）

新春挨拶——庭野日鏡	2
新春挨拶——戸松義晴	3
「IPCR国際セミナー2023」を開催	4～5
核兵器禁止条約 第2回締約国会議を傍聴して	6～7
令和6年能登半島地震への対応	
認定NPO法人ゆめ風基金に緊急支援	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8

新春挨拶

WCRP日本委員会 会長
立正佼成会 会長

庭野日鑑



あけましておめでとうございます。

日ごろから加盟教団の皆さまに多大なるご協力を頂いておりますことに、あつく御礼を申し上げます。

昨年は、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナ武装勢力の衝突などが続き、国際社会に暗い影を落としました。

日本委員会としましては、信頼にもとづく対話を粘り強く進めていくため、昨年度に引き続き、二月に東京で平和円卓会議を開催する予定です。ウクライナ、イスラエル・パレスチナなどからお招きする諸宗教者の対話を通して、紛争解決への糸口が見出されることを期待しています。

加えてコロナ禍が落ち着き、国際的な交流も盛んになってきたことから、東アジアにおける宗教者交流も積極的に進めていく計画であります。

また本年は、タスクフォースの再編の時期にあたります。諸課題に迅速に対応できるよう、新たなタスクフォースの体制を確立してまいります。

日本委員会がACRP事務局を受け入れて、十年目の年でもあります。二〇二六年、ACRPは五十年を迎え、第十回大会も予定されています。より行動的なACRPの実現に向けて、今後も一層のご理解とご協力を頂戴できれば幸いです。

私は、日本委員会の活動を一層充実したものとするには、宗教者独自の活動はもちろん、各界との連

携を深め、「より開かれ、より行動的なWCRP日本委員会」となることが不可欠であると考えてきました。

その意味で、近年、タスクフォースの活動が進展していることは、大変心強いことでもあります。「より開かれ、より行動的なWCRP日本委員会」という目標が、一歩一歩実現していることを実感しています。

WCRPの各国委員会の中で、最も経験があり、結束しているのは、ほかならぬ日本委員会でありましょう。これまで日本委員会を支えてくださった諸先輩方の願い、尊い足跡を忘れることなく、今後も国内外の諸宗教対話・協力の推進にリーダーシップを発揮していきたいと念願しています。

とりわけ日本は、かつて国名を「大和」と定められたことがあり、いわば「大いなる平和」「大いなる調和」を国づくりの礎としてきました。また、聖徳太子は、「和を以て貴しと為す」との言葉を十七条憲法の第一条に掲げられました。

「調和」を重んじる精神文化を現代社会にしっかりと築き上げ、それを世界に発信していくことは、日本の宗教者だからこそできる貴重な貢献であると感じます。

本年も、より一層のお力添えを頂きますよう、切にお願い致します。

新春挨拶

WCRP日本委員会 理事長
浄土宗総合研究所副所長・浄土宗心光院住職

戸松義晴



新年おめでとうございます。

旧年中も世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会のために、温かいご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございました。

一昨年（2022年）9月の理事会で理事長に選任いただき、早くも1年余りがたちました。

就任直後に出席した諸宗教平和円卓会議（東京会議）に続き、韓国宗教平和国際事業団（IPCR）国際セミナー、G7広島サミットへ向けた「宗教者による祈りとシンポジウム」、ウクライナ支援やトルコ・シリア地震支援など、WCRPの平和に向けた取り組みは多岐にわたるものと実感しております。これらの取り組みを通して、さまざまな出会いと対話を重ね、平和をつくることの難しさを感じますと同時に、宗教者だからこそでき得ることをしているという覚悟につながったように思います。

振り返ってみますと、諸宗教平和円卓会議（東京会議）やIPCR国際セミナーで語られた偽りのない言葉が強く印象に残ります。「話し合いなどできません。他人の家に突然押し入り、家族を殺め、物を盗んだ人と和解などできません。盗った物を返し、罪を償ってからの話です」と訴えたウクライナの代表者。また、IPCR国際セミナーの参加者から、

戦争当時の日本による人権侵害に関する厳しい言葉が投げかけられました。さまざまな立場の方々や直接交流し、このように心の底から発せられる叫びを、私は真剣に受けとめ、だからこそ暴力や戦争のない平和的な日常生活の重要性を思い知らされました。その経験によって、合理性を超えた大事なものを感じることができたように思います。

WCRPは、宗教者、宗教団体のネットワークであることが最大の特徴だと思います。一宗教者、一宗教団体では不可能なことも共に手を携えることで可能になります。さらには、公益財団法人の利点を活かしながら宗教間だけでなく、各界との交流や協働を進めることで、私たちの祈りと願いをかたちにするための行動が起こせます。

新年1月は理事会・評議員会・新春学習会から始まり、2月には諸宗教平和円卓会議（第2回東京会議）を開催いたします。2024年も、皆さまと力を合わせ平和への歩みを力強く進めて参りたいと思います。

日本委員会の役員の方々、賛助会員の皆さま、関連団体の皆さまから昨年度いただいたご支援に、改めて感謝申し上げますとともに、さらなるご協力をお願いいたします。

「IPCCR国際セミナー2023」を開催

韓国宗教平和国際事業団（IPCCR）の国際セミナーが昨年12月7日、兵庫県神戸市にある立正佼成会神戸教会で開催された。総合テーマ『東北アジア平和共同体構築のための課題』のもと、日中韓の宗教者、学者など61人が参加した。

IPCCR国際セミナーは、IPCCRと韓国宗教人平和会議（KCRP）、中国宗教者和平委員会（CCRP）、WCRP日本委員会の共催で2009年から日本、中国、韓国の宗教者らが毎年集い、東北アジアが直面している諸問題について議論を重ねている。

前日6日、セミナーに先立ち歓迎レセプションが開催され、三方国の代表によるあいさつや参加者紹介が行われた。

7日は、会場となった立正佼成会神戸教会を参拝し、教会設立の経緯や施設の説明などを受けた。

開会式では、戸松義晴WCRP日本委員会理事（浄土宗総合研究所副所長・浄土宗心光院住職）、チェ・ゾンスKCRP代表会長、そしてシー・ミンハイ中国宗教者和平委員会（CCRP）委員があいさつ。戸松理事長は、日本が過去に中国や韓国に与えた苦



戸松理事長

つ。戸松理事長は、日本が過去に中国や韓国に与えた苦

痛や尊厳を傷つけたことについて、僧侶として大変申し訳なく感じしていると謝罪。さらに、平和は単に戦争や争いのない状態だけでなく、人びとが安心して暮らせることであると述べ、一人ひとりが笑顔で過ごせる日々を実現するために、共に努力していきたいと語った。

続けて、被災地NGO協働センター顧問の村井雅清氏が、『自然災害における宗教者への期待』と題し、基調講演に立った。村井氏は、阪神・淡路大震災を中心に、東日本大震災や熊本地震などの被災地における宗教者の支援活動を紹介。寺院を避難所として活用した例や「高野山足湯隊」の足湯を通じた心のケアを紹介した。また、被災者が感情を吐露できることが自立への一歩だと強調。アルトジウスとピオ十一世の言葉を引用し、生活共同体の重要性を強調した。さらに支え合



村井氏

ると期待を寄せた。

この後、三つのセッションが行われた。セッション1では、『コロナが宗教に及ぼした影響と宗教が進むべき道』をテーマにした韓国聖公会大学研究教授のチョン・ギヨン氏が登壇した。

ギヨン氏は、新型コロナウイルス感



ギヨンイル氏

染症のパンデミックにおける試練の中で、本質的な問いに直面し、新たな理解と結末を見出したと述べた。パンデミックは困難をもたらしたが、心からのコミュニケーションの重要性、信仰と共同体の喜びを再発見する契機となったと話した。

また、ツウ・ジェCCR P委員（北京カトリック司牧委員会事務長）、キム・ヨンソンKCRP中央委員（韓国カトリック協議会次長）と共に、パネリストの一人として平和研究所の金子昭所員（天理大学おやさと研究所教授）が登壇。



金子所員

金子所員は、ギヨンイル氏の登壇に対し、①文明と宗教という視点について②宗教の変容について③非常事態における宗教倫理について④宗教における意識改革についての四つのポイントから見解を述べた。

セッション2では『東北アジアの平和共同体構築における宗教・文化交流の積極的役割』をテーマに、WCRP日本委員会理事の山本俊正氏（元関西学院大学教授）のコーディネートのもと、中国仏教協会副会長でCCRP委員のシー・ミンハイ師が登壇した。



シー・ミンハイ師
シー・ミンハイ師は、同協会元会長の趙樸初居士師が提唱した日中韓の仏教界の交流を示す『黄金紐帯』を例示し、これまでの三

国の歴史的な繋がりを紹介した。加えて、『和して異なる、異なって和する』宗教的調和は、グローバル化時代の多文化共生のモデルと言えるのではないかと見解を述べた。

KCRP中央委員で韓民族宗教協議会理事のハン・ジェフン氏、CGRP委員で中国宗教学会副会長のドウ・ウエン氏と共に、平和研究所の松井ケティ所員（清泉女子大学教授）がパネリストを務めた。

松井所員は、シー・ミンハイ師の発題を受け、『黄金紐帯』という言葉は、温かさや美しさを感じさせると述べた。また、三つのキーワードとして「友好」…お互いを敬う尊厳の心、「平和」…歴史と未来をつなぐ継続・持続可能な努力、「協力」…共に作業をする行動の重要性、という視点から発題を行った。

セッション3『自然災害における宗教者の役割』では、東日本大震災における被災者らの支援活動を行ってきた曹洞宗通大寺の金田諦應住職が講演した。

震災前は自死防止活動を行っていた金田氏だが、自身も震災を経験し、知人の僧侶



金田住職
たちに呼びかけ火葬場で死者を弔うことから始めた。悲惨な状況下で人びとの凍り付いて

しまった心に触れ、宗教者として「凍り付いた心を溶かし、未来への物語を紡ぐ」ため傾聴移動喫茶「カフェデモンク」を開設。被災地で約400回開店し、「どうして私が生き残ったのか」などと問う被災者の声に向き合った。これまでの宗教的言語を拒絶するような凄みを持つ『苦悩の物語』を引き受ける中で、金田住職自身も逃げ出したくなる自分がいたことを告白。答えの出せない問いに苦悶しながらの傾聴活動の中で、「自と他」の境界線が透明になっていく

感覚、各々にレジリエンスがあることを確信し、傾聴活動における宗教者の役割とは、それぞれの教義の安らぎに導くのではなく、それぞれの人生の物語が立ち上がるまで、揺れ動く心情と同期しながら、行きつ戻りつの長い時間を共に歩むことであると語った。さらに「宗教者よ、現場を見ろ。苦しみ悲しみの現場を見ろ。現場から立ち上がる沈黙の言葉を聴け！ここから絶対離れるな」と力説した。

KCRP宗教間対話委員会委員長でソクァン寺のソンジン住職がコーディネーターを務め、CGRP委員で中国イスラム協会イスラム文化研究部長のマ・ジェ氏、



稲葉教授
KCRP中央委員で韓国成均館対外協力室室長のバン・ドンヨン氏、大阪大学大学院教

授の稲場圭信氏がパネリストとして登壇した。

稲場教授は金田氏の発題を受け、近年の災害における宗教者の取り組みを紹介した。また、無宗教を自認する人の割合が7割を超えと言われる中で、日本人の多くが災害による犠牲者、被災者そして被災地に対し祈りを捧げたことは、困難な状況にある人への共感によるつながりとして、『共感縁』が誕生した、とまとめた。

翌8日、参加者は『阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター』を訪問した。阪神淡路大震災においても人びとは、被災者の悲しみに触れ、協働し、復興に立ち向かっていったことをあらためて確認し合った。



親交を深めた参加者たち

核兵器禁止条約

第2回締約国会議を傍聴して

ストップ！核依存タスクフォース

メンバー 神谷昌道

はじめに

2023年11月27日から12月1日の5日間、ニューヨークの国連本部で核兵器禁止条約(TPNW)第2回締約国会議が開催された。この会議には、条約に署名・批准する59の国と地域のほか、35カ国がオブザーバーとして出席した。

米国の「核のカサ」を享受する日本政府はオブザーバー出席をしなかった一方、北



会場全体

大西洋条約機構(NATO)の「核のカサ」下にあるドイツ、ノルウェーそしてベルギーは、オブザーバーを会議に派遣した。これら3カ国ができて日本政府がで

きない理由は何なのか、深く考えさせられる対比であった。

一方、世界の100を超えるNGO組織から700名以上の市民社会代表が会議に集った。その中には、若い世代の人々が多くみられた。政府間会合の場で、多くの若者が核兵器の廃絶を訴える姿は、高齢化が進む被爆者から次世代へと、核兵器廃絶の願いが継承されていることを実感できる光景であった。

これら市民社会の代表者たちは、締約国会議に並行する形で、65におよぶサイドイベントを実施した。WCRP国際委員会(Religions for Peace)も「持続可能な平和・正義そして開発のためのTPNW普遍化における宗教者とICANの戦略的パートナーシップについて」をテーマにパネル討論会を実施した。筆者は、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)事務局長を含めたパネリストの一人として発題した(注)。

会議の概要

5日間にわたる会議の主要議題は、核兵器の申告(条約2条)、核兵器の全廃(同4条)、国内の措置(同5条)、被害者援助と



WCRP 国際委員会のパネル討論会で発言する筆者(中央)

における検討プロセスの枠組み化、さらにはTPNWと他の軍縮条約との補完関係や軍縮とジェンダーの問題なども重要な議題だった。

これら主要議題に加え、2種のテーマ別討論が実施された。第1のテーマは、人道的影響が核兵器禁止の基盤となる理由、第2のテーマは、核兵器禁止を擁護するための施策だった。「核兵器の人的影響が国連の公式会議で初めて議論された」と、いくつかの国がテーマ別討論の意義を強調した。

環境修復

(同6条と

7条)、そし

て条約の普

遍化(同12

条)などだ

った。また、

人道的影響

に関する科

学・技術的

アプローチ

の強化、締

約国会議間

主な成果点

会議最終日に採択された文書は「宣言」、
「諸決定」、そして「報告書」だった。成果
点の第1は、「科学者諮問グループ」の科学
的知見が重要視されたこと、第2は、次回
締約国会議で合意が期待される「国際信託
基金」の設置を含めた被害者援助と環境修
復に関する議論が深まったこと、そして第
3は、安全保障ドクトリンや核抑止政策の
誤謬性について活発な議論が展開されたこ
とだった。「国家の安全を保証するために核
兵器が欠かせない」という核保有国の主張
に対して、TPNW締約国は、「国家の安全
を保証するための唯一の方法は、核兵器の
禁止のみである」と声高に訴えたのであつ
た。

出すこととなる。

その他の決定事項は、条約の履行のため
の締約国会議間のあり方、締約国会議での
テーマ別討論のあり方、条約6条ならびに
7条に基づく自主的報告のあり方、被害者
援助と環境修復のための国際信託基金につ
いてであった。

WCRP日本委員会の責務

これら会議の成果を踏まえ、今後、WC
RP日本委員会として取り組むことが可能
と思われる分野として、①条約への署名・
批准を求めている日本政府への継続的働きか
け、②日本政府への働きかけを含め、核抑
止政策からの脱却に向けての幅広い訴えと
行動、③2025年に設置が見込まれてい
る国際信託基金への貢献を含めた被害者援
助と環境修復への取り組み、そして④WC
RP日本委員会独自でのTPNW締約国会
議への登録と参加などが考えられよう。締
約国会議では、NGOであっても会議中に
発言が許され、作業文書の提出ができる。
それらを通じて、締約国会議に日本の宗教
者の声を届けることができるのである。
また今回の会議では、広島と長崎の戦争

被爆者や核実験による被爆者のみならず、
ウラニウム採掘場で被曝する被害者がいる
ことに焦点が当てられた。ウラニウム採掘
場はアジアに点在していることから、この
問題はアジア全体の問題としてACRPの
枠組みで取組むことも可能と思われる。
第3回締約国会議は、2025年3月3
日から7日まで、ニューヨークの国連本部
で開催されることが決まった。

(注) 対面とオンラインで開催されたこのイ

ベントで筆者は、宗教者が戦略的パー
トナーとしての役割を果たし得る利
点として、①宗教者(組織)は、宗教
の原理が土台の一つと言われる国際
法秩序の守護者であること、②宗教者
(組織)は、国境や人種などの分断を
克服する触媒であること、そして③宗
教者(組織)は、核なき世界を創造す
るための道徳的、倫理的責務の擁護者
であることを指摘しながら、宗教者
(組織)が、TPNWの普遍化(加盟
国や擁護国の増加の意味)に向けて重
要なアクターであることを強調した。

令和6年能登半島地震への対応 認定NPO法人ゆめ風基金に緊急支援

1月1日午後4時10分、能登半島を震源とするM7・6の地震が発生し、最大震度7を観測。石川県を中心に甚大な被害に見舞われている。2週間が経過した時点で死者は200人を超え、1万6千人以上の人々が避難生活を余儀なくされている。

WCRP日本委員会は、1月10日に災害対応タスクフォースを開催、今後の支援の方針を決定し動き出した。

まず、緊急支援として、被災障がい者の救援を目的に活動する認定NPO法人ゆめ風基金に対して緊急支出を行った。ゆめ風基金は全国の障がい者団体や施設（現在約50団体）と連携し、「一番困っているところにすばやく届ける」ことをモットーに活動している団体。今回も、そのネットワークの一つゆめ風ネット加賀と連携し、被災障がい者や施設に水や食料などの支援物資を

届ける活動を行っている。

能登半島地震においても支援の必要性は今後高まってくる事が予想される。被災された人々に対し継続した支援活動を実施するため、緊急支援募金を行う。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

然生（ぜんしょう）

新年早々、多事多難なニュースを立て続けに聞き、心を痛めている方も多いと思う。ふと物思いにふけると、大自然、地球の中で生かされている「いのち」なのかもしれないと感じた。だからこそ、地球で生きる様々ないのちを大切にしていきたいとの願いをこの二文字に込めて。

WCRPの活動

《1月》

10日 災害対応タスクフォース第4回会合（オンライン）

11日 日本バグウォッシュ会議 第3回公開講座（共催・オンライン）

17日 第4回総合企画委員会（オンライン）

25日 理事会、評議員会、新春学習会、茶話交流会（東京・立正佼成会法輪閣／オンライン併用）

《2月》

9日 災害対応タスクフォース第5回会合（オンライン）

18～22日 「戦争を超え、和解へ」諸宗教平和円卓会議（第2回東京平和円卓会議／東京・新宿）

20～23日 アジア・ユースキャンプ2023（韓国）

26日 平和研究所第9回所員会議・研究会（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）

29日 和解の教育タスクフォース第4回会合

掲載内容の無断転載を禁ず。